

【論 文】

国内外の大学の科目ナンバリング・システムについての考察†

正路 真一*・守山 紗弥加*2・和気 尚美*3・山本 裕子*4

三重大学地域人材教育開発機構**3・三重大学教養教育院*2・名古屋商科大学国際学部*4

2008年に文部科学省によって掲げられた教育課程の編成・実施(カリキュラム・ポリシー)の検討・整備に伴って、現在日本では科目ナンバリングを導入する大学が急速に増えている。科目ナンバリングの導入による利点の一つとして学生が留学・編入学・転学・転部した場合の単位互換を容易にするという点が挙げられるが、本研究は、国内外の大学の科目ナンバリングの導入状況、また各大学のナンバリングの設定の有無やそのあり方を調査し、各大学間の科目ナンバリング・システムが一定の整合性を有する必要性を確認するものである。

キーワード: 科目ナンバリング, CP, 教育課程の可視化, 単位互換, 整合性のあるシステム

1. はじめに

科目ナンバリングとは、大学の授業科目にアルファベットや数字によるコードを与えて、教育課程を体系的に明示するシステムのことである。これは平成20年に文部科学省中央教育審議会の答申『学士課程教育の構築に向けて』(文部科学省2008)で掲げられた3つのポリシー、学位授与の方針(Diploma Policy; DP)・教育課程編成・実施の方針(Curriculum Policy; CP)・入学者受け入れの方針(Admission Policy; AP)の内、特にCPの内容に沿ったものである(川嶋2013)。

すなわち、教育課程の編成・実施に伴って、学生らが学士課程を修了するまでにどういった経路を辿って修学すべき内容を身につけるべきかを「学生をはじめ、当該大学の学部、学科等が提供している教育課程の内容に関心を持つ全ての人」(文部科学省2012a)が容易に理解できるように、コード番号によって科目間の関連や科目内容の難易を可視化することが、科目ナンバリングの目的と言われる(橋本2016)。

科目ナンバリングの実施の利点は、大学にとっては、教育課程が体系的に可視化されることで、学生に学位取得までのロードマップを明示することができるという点がある(川嶋2013, 橋本2016)。これにより、学生にとっては履修科目を選択しやすいうという利点が生まれる。また、学生と指導教員等の双方にとって、学修の到達度が確認できるという利点がある(川嶋2013, 橋本2016)。

例えば2年次に受講すべきことを意味する「2」というナンバーが付与されている科目を、学生が3年生の時期に履修していれば、この学生は卒業に必要な単位の取得が遅れていることが分かる。

更に、授業科目にナンバーが付与されることで、学生が編入学や留学、転学または転部した場合の単位互換を容易にする利点も生まれる(川嶋2013, 吉田2015, 橋本2016)。具体的には、編入してきた学生が履修済みの科目に難易度を表すナンバーが付与されていれば、編入先の大学ではこれに対応する科目が自大学のどの科目にあたるかある程度理解することができる。ただし、これには各大学間のナンバリング・システム(ナンバーの付与の仕方)が一定の整合性を有することが必要と考えられる。

さて、そもそも初めて体系的なナンバリングを考案したのは1930年に米国オハイオ州に設立されたKent State Collegeであるが、これはKent State Collegeが教員養成の師範学校とリベラルアーツカレッジが合併して設立されたため、この二つの学校の間で対応するコースを明確にする必要があったという事情によるものであった(Rogers & Williams 1935)。

以上より、本研究は、日本国内の大学において科目ナンバリングが普及し始めている現状を鑑み、科目ナンバリング・システムの現状調査、及び当該システムのあるべき姿について検討し、考察を行う。具体的には、まず科目ナンバリングの原点である米国大学のシステムを概観した上で、その他の海外大学の科目ナンバリング・システムについて、聞き取り調査を実施し、その結果を報告する。次に、日本国内の複数の大学の科目ナンバリング・システムを確認し、現状と課題を明らかにする。具体的には、国内の大学間に整合性のあるナンバリング・システムが構築されていない点に着目し、編入学や転学等を含む学生の大学間の移動に伴う単位互換の容易性を担保するために、大学間で整合性のあるナンバリング・システムを構築する必要性があることを指摘する。

2. 米国大学における科目ナンバリング

海外の大学における科目ナンバーをレビューすると、ナンバリング発祥の地で、かつ学生の編入学が多い米国では、ほぼ全ての大学において科目ナンバーが導入されているようである。

基本的に米国大学のナンバリング・システムは、科目を開講している学科、すなわち学問分野を略字で表すアルファベットに続いて3桁(ないし4桁)の数字を付与している。

3桁の数字の内100桁台は、一般的に難易度を表す。例えば100番台～200番台は主に1,2年生が履修する一般教養科目、300番台～400番台は3,4年生が履修する専門科目、500番台以上は大学院の科目であることが多い(島田 2013b, 栄 2014)。

ただし、難易度と履修学年を示す100桁台の数字については、一般的に米国大学では学年の概念が薄く、1年生、2年生、3年生、4年生の区別がはっきりしていないことに留意されたい(島田 2013a)。卒業に必要とされる単位を取得すれば卒業できるが、3年で取得単位を揃えて卒業する学生もいれば、5年かけて単位を揃えて卒業に至る学生もいる。従って、米国大学の科目ナンバーにおける100桁台の数字は、履修学年というよりも科目の難易度を表していると考えべきである。

ここでは、米国大学の科目ナンバリングの一例として、サウスカロライナ大学(2019a, b)の『2019-2020 Undergraduate Studies Bulletin』と『2019-2020 Graduate Studies Bulletin』を参考に、当該大学の科目ナンバーを確認しよう。言語学のクラスであれば「Linguistics」の略としてLINGというアルファベットが用いられ、一般教養科目の初級言語学入門のクラスであれば、難易度としての初級を表す「1」を100桁台に据え、LING101といった具合にナンバリングされている。

最後の3桁の数字の内10桁台の数字は、科目の分野を表している。サウスカロライナ大学の言語学科目の例では、音韻論に関する科目には1、統語論に関する科目には2、第二言語習得に関する科目には9という数字が与えられており、例えば大学院の音韻論入門のクラスはLING710、統語論入門のクラスはLING720、第二言語習得入門にはLING790とナンバリングされていることがわかる。

1桁台の数字は、履修順序を表していることが多い。サウスカロライナ大学では、音韻論入門(LING710)、統語論入門(LING720)、第二言語習得入門(LING790)よりも上のレベルのクラスである音韻論概説はLING711、統語論概説はLING721、第二言語習得概説はLING791となっている。LING710、LING720、

LING790を履修済みの学生のみLING711、LING721、LING791が履修できるという履修順序が、1桁目の数字によって示されている。

しかしながら、1桁目の数字については履修順序を示すものばかりではない。履修順序が特に規定されていない科目も多くある。そうした場合は、機械的に1桁目の数字が連番で与えられる。例えば、第二言語習得入門(LING790)を履修済みであれば第二言語習得概説(LING791)も第二言語教育原理(LING792)も順不同で履修することが許されている。このLING791とLING792の1桁目の数字には特定の意味はなく、単に科目の別を連番で表すものである。

以上のような科目ナンバリング・システムに対する理解は、米国全体に広く行き渡っており、学生や教員が日常会話の中で、科目をナンバーで呼ぶことも一般的である。特に101というナンバーについては、「初級・簡単・いろはのい」という認識が大学関係者のみならず一般的にも共有されており、大学とは関係のない内容の会話においても頻繁に使われる¹⁾。

3桁のナンバーの中でも難易度を示す100桁台の数字については、1～4が学部レベル、5以上が大学院レベルという共通理解があり、例えばある大学のLING101という科目は、別の大学のLING101と同等のレベルの科目であると解釈される(島田 2013b, 栄 2014)。一方で、10桁台や1桁台のナンバーの付与の仕方は各大学によってばらつきがある(栄 2014)。

このように科目ナンバリングに対する一定の共通理解があるとはいえ、米国には3000、4000の高等教育機関があり(川嶋 2013)、またその規模も様々であるので、各大学のナンバリング・システムにばらつきが生まれるのは避けられない。例えば、3桁ではなく4桁や5桁の数字を科目ナンバーに配当している大学も多くある。それでも、米国では編入学が頻繁なため、異なる大学間で対応する科目が明らかになるよう、様々な施策が検討されている。例えば、米国の14の州では、1999年までに、州内の公立大学において共通の科目ナンバリングを構築していた(Forest & Kinser 2002)。またテキサス州では、学生の編入学に伴う単位互換を容易にするために、州内大学の一般教養科目の履修においてTexas Common Course Numbering System(TCCNS)が導入されている(文部科学省 2012b)。これは、TCCNSに加入しているテキサス州内の全ての大学の一般教養科目について、各大学間で対応する科目を一覧表として提示したものである。このTCCNSの対応科目一覧表は、年に4回、定期的に見直しや調整が行われている。

3. 米国以外の海外大学における科目ナンバリング

本章では、米国以外の海外大学における科目ナンバーの状況を確認するために、筆者らが実施したメールによる聞き取り調査の結果を報告する。

聞き取り調査の対象となった調査協力者は、アフガニスタンの大学、中国の大学（2校）、ドイツの大学、韓国の大学、バングラデシュの大学の教員計6名、及びブラジルの大学（2校）、イギリスの大学（同校から2名）、フランスの大学、ベトナムの大学（2校）、ブルガリアの大学の在学生・卒業生計8名である。

なお、調査協力者は、いずれもスノーボール・サンプリング（雪だるま式標本法）で決定した。調査手順は、第2章で述べたような米国大学のナンバリング・システムを説明した後、調査協力者が所属する（していた）大学では米国大学のようにアルファベットや数字で科目の別が示されているか、示されているならどのように示されているかについて質問した。結果の概要を表1に示す。

表1 海外（米国外）の科目ナンバリング・システム

NO.	大学名	国名	アルファベット/数字で示されているか否か（Yesの場合の表示法）
1	成均館大学校	韓国	No
2	アガ工科大学	バングラデシュ	No
3	ソフィア大学	ブルガリア	No
4	上海海洋大学	中国	No
5	暨南大学	中国	Yes（数字）
6	ハイデルベルク大学	ドイツ	Yes（アルファベット）
7	ヘラート大学	アフガニスタン	Yes（数字+アルファベット）
8	サンパウロ大学	ブラジル	Yes（アルファベット+数字）
9	ミナス・ジェライス連邦大学	ブラジル	Yes（アルファベット+数字）
10	リール第3大学	フランス	Yes（アルファベット+数字）
11	セントラル・ランカシャー大学	イギリス	Yes（アルファベット+数字）
12	ホーチミン市師範大学	ベトナム	Yes（アルファベット+数字）
13	ハノイ貿易大学	ベトナム	Yes（アルファベット+数字）

まず、韓国の成均館大学校、バングラデシュのノアカリ科学工科大学、ブルガリアのソフィア大学、中国の上海海洋大学の教員・学生を対象とした調査結果であるが、上記4校においては「科目ナンバリングが採用されていない（または所属大学における科目ナンバリングの存在を知らない）」という回答が得られた。中国の上海海洋大学の教員からは「科目ナンバリングというシステムを初めて耳にした」という回答を得た。また、同じ中国の暨南大学においては、例えば201780543といった数字が授業科目に与えられてはいるものの、調査協力者の教員によると、「これは米国大学のようなナンバリングとは違うもので、こうした番号が何を意味するものか当の教員も理解していない」とのことであった。

次に、ドイツのハイデルベルク大学においては、各科目はOAWGのように頭文字を使った略語が用いられているのみであり、これはハイデルベルク大学に限らず、ドイツの他の大学においても、科目の頭文字を用いたなんらかの略語を使っているという点において同様であるという点であった。

アフガニスタンのヘラート大学では、授業科目は1A、2Bといったように、数字とアルファベットそれぞれ1文字ずつでナンバリングされている。この数字は履修学年を意味し（1は1年生対象科目）、アルファベットは授業が行われる校舎を示している。1桁の数字と1文字のアルファベットだけでナンバーが構成されているため、このナンバリング・システムが表せるものとしては2種類の項目だけである（ヘラート大学の例では履修学年と校舎）。従って、数字の桁を増やすなどしない限り、二項目以上の情報（学問分野の中分類や小分類、難易度または履修順序など）を示すことは不可能と推察された。

ブラジルのサンパウロ大学の学生にも聞き取り調査を行ったが、サンパウロ大学には米国に似た科目ナンバーが存在する。例えば、初級日本語のクラスであれば、FLO1511という番号が付与されており、最初のアルファベット（F）は開講部局、次の2文字のアルファベット（LO）は学科、1,000桁台と100桁台の2桁の数字は学問分野を表す（例：15はJapanese Studies）。今回の調査では10桁台が何を示すものであるかは判明しなかったが、1桁台は履修順序を示している。例えば、初級日本語IならFLO1511、初級日本語IIならFLO1512といった具合である。授業科目の難易度は示されていないものの、サンパウロ大学の科目ナンバリング・システムは今回調査をした米国以外の海外大学の中では、最も米国に近いシステムであった。

同じくブラジルのミナス・ジェライス連邦大学の卒業生を対象に行った聞き取り調査によると、この大学でも

科目にアルファベットと 3 桁の数字でナンバーが付与されている。アルファベットは米国と同じように開講部局すなわち学問分野を表しており、1 桁目の数字は履修順序を表している。例えば、初級ドイツ語 I なら LEG606、初級ドイツ語 II なら LEG607 である。ただし、100 桁目と 10 桁目の番号が何を表しているかについては、調査協力者によると不明であった。

フランスのリール第 3 大学の学生に行った調査では、この大学でも科目ナンバーが存在するという回答が得られた。例えば、1LLJA1A1 で、最初の 1 は履修順序（最初の学期に履修するべき科目）を、また JA というアルファベットは科目（Japanese）を表す。また末尾の 1 は、科目の分野を表す。例えば 1LLJA1A1 は日本語文法、1LLJA1A2 は日本語言語学である。しかし、その他のアルファベットや数字（LL, 1A）が何を示しているのかは不明であった。

イギリスのセントラル・ランカシャー大学の学生（2 名）を対象に行った調査によると、セントラル・ランカシャー大学では科目に「モジュール・コード」と呼ばれるナンバーが与えられている。例えば、この大学の初級日本語クラスには、JS1106 というコードが与えられている。このモジュール・コードでは、最初のアルファベット 2 文字が科目の分野を表す（例：JS は Japanese Studies）。また数字 4 桁の内、1,000 桁台は難易度（履修年次）を表す。1 年生対象科目なら 1、2 年生対象科目なら 2 である。100 桁台と 10 桁台の数字が何を表すかは不明であったが、1 桁台の数字は、科目の別を表すための連番となっている。例えば、JS2060 と JS2061 は等しく 2 年生対象の日本語クラスであるが、別の教員が担当する科目である。

図 1 は、調査協力者の学生により提供された、学生がオンラインで閲覧できる科目名とナンバリングの画面である。

JS2051 : Aspects of Japanese Society (2016-2017, Sem 1 and 2) (University Main Campus)
JS2061 : Japanese Language 2B (2016-2017, Semester 2) (University Main Campus)
LW2032 : War Crimes Trials (2016-2017, Semester 1) (University Main Campus)
ML2882 : Assessed Year Abroad (2017-2018, Sem 1 and 2) (University Main Campus)

図 1 セントラル・ランカシャー大学のモジュール・コード画面（調査協力者提供）

図 1 にある 4 つの科目のモジュール・コードを当該大学のホームページ上で検索すると、いずれも結果は“**No results found**”であったことから、米国のように科目名と科目ナンバーを日常的に紐づけて表すということは少ないと推察された。この学生によると、米国のように学生が科目名をナンバーで呼ぶことはなく、成績確認の際などに画面上で目にするだけということであった。

ベトナムの大学 2 校についての調査結果であるが、ホーチン市師範大学では、例えば日本語・日本文化関係のクラスには JAPN100221, JAPN103220 といったナンバーが付与されている。ベトナムのハノイ貿易大学のクラスにおいても JAPAN01, JAPAN02 といったようなナンバーが科目に付与されているが、アルファベットが科目の分野を表している一方、数字は機械的に連番で与えられているだけである。

以上の調査結果より、調査対象となった 13 校（10 カ国）の内、科目ナンバリングを採用していない大学が、韓国、バングラデシュ、ブルガリア、中国（1 校）の計 4 校に対し、アルファベットや数字を用いた何らかのナンバリングを導入している大学が中国（1 校）、ドイツ、アフガニスタン、ブラジル（2 校）、イギリス、フランス、ベトナム（2 校）の計 9 校であった。しかし、ナンバリングを採用している 9 大学においても、そのシステムは国によって千差万別であり、またほとんどの調査協力者によると、履修登録などの機会に科目ナンバーを確認するものの、米国のように日常的に自分の履修科目をナンバーで呼ぶ、または日常会話の中で口にする（例：注 1 参照）ことはないとのことであった。これらを踏まえ、次節では、国内に目を向け、日本の大学における科目ナンバリングの状況を報告する。

4. 日本の大学における科目ナンバリング

現在、科目ナンバリングを導入している日本の大学は全体の約 3 割に過ぎないが、その数は急速に増えている（橋本 2016）。文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会の調べでは、平成 24 年に約 17% であった「ナンバリング等の授業科目の教育課程内の位置付けや水準を表す数字や記号」を採用している大学は、平成 27 年度には約 31% にまで増えている（文部科学省 2017）。しかし現在のところ、科目の分野、専門・基礎の別、履修学年、連番を基準にアルファベットと 3~4 桁の数字からなるナンバリングを実施している大学が多いものの、大学間で統一性のあるスタンダードは存在しない（橋本 2016）。

表 2 は、今回調査した国内大学のナンバリング・システムをまとめたものである。国内の科目ナンバリングの

具体例として、まず日本では珍しく開学以来ナンバリングを採用している国際基督教大学 (ICU) を確認する。ICU の科目は、科目の学問分野の分類を示すアルファベット 3 文字 (例: アメリカ研究科目は AMS, 美術・考古学科目は ARA) とこれに続く 3 桁の数字でナンバリングされている。早稲田大学国際教養学部においても、科目の学問的な分類を示すアルファベット (2 文字) と 3 桁の数字でナンバリングされている。私立である、両方の大学の科目ナンバーは、100 番台の数字は難易度を示しているという点で共通している。

次に、国立の例に移る。北海道大学を見ると、開講部局と開講学科を表す 5 文字のアルファベットと、これに続く 4 桁の数字を用いて授業科目をナンバリングしている。4 桁の数字の内 1,000 桁台は難易度を表しているが、1~4 は学部生対象科目、5~9 は大学院科目となっている。そして 100 桁台は学問分野の中分類を、10 桁台は小分類を表し、1 桁台はその科目で使用する言語を表している (例: 日本語は 0, 英語は 1) (北海道大学 2013)。

岐阜大学の科目ナンバリングは、北海道大学と似通っており、まずアルファベットで開講学部と学科が示される。ただし岐阜大学の場合、アルファベットの文字数が一定ではなく、例えば工学部の機械工学科科目は ENG_MEE, 電気電子・情報工学科科目は ENG_EECE となっている。これに 4 桁の番号が続くが、1,000 桁台は科目の難易度を、100 桁台と 10 桁台は科目の学問分野の中分類と小分類をそれぞれ表す。1 桁台の番号は北海道大学と違って授業形態 (例: 講義は 1, 実験は 2, 演習は 3, 実習は 4) を示す。更に、日本語以外で行われる科目に関しては、最後にアルファベットを付記する (例: 英語は e) (岐阜大学 2016)。

東京大学は、最初のアルファベット 5 文字が、学部前期課程や学部後期課程、大学院課程などの課程の別 (1 文字)、開講部局 (2 文字)、開講学科 (2 文字) を表す。そしてこれに続く 4 桁の数字が、難易度 (1000 桁台)、学問分野 (100 桁台)、整理番号 (10 桁台と 1 桁台) を示し、その後ろに講義、演習、実験などの授業形態を表すアルファベット 1 文字、最後に授業で使用される言語を数字 1 桁で表している (東京大学 n.d.)。

大阪市立大学は、部局を表す 2 文字のアルファベット (例: 理学部は SA) の他、学問上の分野を表す 3 文字のアルファベット (例: 数理解析科目は ANA), そしてこれに続く 4 桁の数字によるナンバリングを採用している。1,000 桁台は学修マップ上の学習段階を表し、100 桁台は対象学年または難易度を表し、10 桁台と 1 桁台の 2 つの番号は 1,000 桁台と 100 桁台の数字が同一の場合に、科

目を区別するために機械的に連番で数字が与えられている (橋本 2016)。

表 2 国内の科目ナンバリング・システム

NO.	大学名	①科目ナンバーの構成 ②開講部局学科が示されているか ③学問分野が示されているか ④使用する言語が示されているか (②③④について、Yes 場合の表示法)
1	国際基督教大学	①ABC123 ②No ③Yes (アルファベット) ④No
2	早稲田大学国際教養学部	①AB123 ②No ③Yes (アルファベット) ④No
3	北海道大学	①ABC_DE1234 ②Yes (アルファベット) ③No ④Yes (数字)
4	岐阜大学	①ABC_DEF1234 ②Yes (アルファベット) ③No ④Yes (アルファベット)
5	東京大学	①ABC-DF123G4 ②Yes (アルファベット) ③No ④Yes (数字)
6	大阪市立大学	①ABCDE1234 ②Yes (アルファベット) ③Yes (アルファベット) ④No
7	九州大学	①ABC-DEF1234G ②Yes (アルファベット) ③Yes (アルファベット) ④Yes (アルファベット)
8	東北大学	①ABC-DEF1234G ②Yes (アルファベット) ③Yes (アルファベット) ④Yes (アルファベット)
9	新潟大学	①1234 ②No ③Yes (数字) ④No
10	広島大学	①1E2345A67 ②Yes (アルファベット or 数字+アルファベット) ③Yes (数字) ④Yes (アルファベット)

九州大学では、最初の 6 文字のアルファベットが開講部局 (3 文字) と学部分野 (3 文字) を示しているという点が大阪市立大学と共通している。例えば、工学部の土木関係科目は ENG-CVL となる (ENG は engineering を、CVL は civil engineering を示す)。そしてアルファベッ

トの後に4桁の数字が続くが、1,000桁台は科目の難易度を表し、100桁台と10桁台は科目の学問分野の中分類と小分類を表す。1桁台の数字は受講順序に連続性がある科目にはこれを連番で示す。この4桁の数字の後に、授業で使用される言語をアルファベット一文字で表す(例：日本語はJ、英語はE) (九州大学 2014)。

東北大学でも、最初の6文字のアルファベットが開講部局(1文字)・学科(2文字)、そして学問分野(3文字)を表している。それに続く3桁の数字の中で、100桁台は難易度を表しているが、10桁台と1桁台は、1~99までの通し番号で学問分野を分類するというシンプルな作りになっている。そして最後に、その科目で使用する言語をアルファベット一文字で示す(東北大学 2014)。

新潟大学では、4桁の数字を各科目に付与しており、ここでは1,000桁台と100桁台の数字が学問分野を表している(例：法律学は34、政治学は35、経済学は36、経営学は37)。10桁台と1桁台は、水準コードと呼ばれるもので、10桁台は「全学の学生が受けられる科目」、「当該学部(学科)の学生に限られる科目」、「資格科目」の別を表すものであり、1桁台は「大学での学習を円滑にするための科目(1年生対象)」、「高等学校との接続を意識したリメディアル」、「通常の基礎科目」といった科目の種類を別を表している(川嶋 2013)。

新潟大学と同じく、広島大学でも、学問分野を数字で示している。広島大学の科目ナンバリングは、(難易度に相当する)学修段階を示す数字1桁、使用言語を示すアルファベット1文字、学問分野の大分類を表す数字2桁、中分類を表す数字2桁、そして科目を一つずつ区別するための講義コード(アルファベット1文字あるいは数字1桁とアルファベットの組み合わせが開講部局を表し、これに複数桁の数字が続く)から成っている(広島大学 n.d.)。

以上の例は、国内の全大学の事例を網羅したものではないが、ここから各大学の科目ナンバリング・システムが様々であることが分かる。まず科目ナンバーの全体的な構成(何文字のアルファベットと何桁の数字であるか)が一貫しておらず、開講主体である部局や科目の学問分野を表示しているものとしていないものがある。またアルファベットが表すもの、数字の各桁が表すものにも統一性がなく、更に同じ項目を数字で示すかアルファベットで示すかについても整合性は見られない。

大学間の科目ナンバリングに整合性が見られないということは、留学や編入などの学生の移動に寄与する機能が薄いことを意味するが、一方で日本の大学の科目ナンバリングは、転部・転科または学部・学科横断的な履修などの学内移動に重きを置いているとも考えられる。例え

ば、いくつかの大学では、科目ナンバリングとともにカリキュラムツリーやカリキュラムマップが併用されていた。例えば、摂南大学では在学生向けのページに、カリキュラムツリーと科目ナンバリングを合わせて提示している(摂南大学 n.d.)。

5. まとめ：課題と展望

第4章では様々な国内大学の科目ナンバリングの事例を報告したが、大学間での不均一が確認された。

本稿の冒頭で、「学生が編入学等をした場合の単位互換を容易にする」という点を科目ナンバリングの利点の一つとして挙げたが、現状は各大学によってナンバリング・システムが異なっているため、この利点が損なわれている可能性がある。日本では学生が大学を移動することが、米国ほど一般的ではない。しかし、今後の日本は更なる少子化が予測されており、かつ世界は更にグローバル化していく中で、学修形態の多様化が進み、国内での編入学数・転学数・転部数が増加する場合、また日本の学生が海外の大学(特に科目ナンバリングに大きく依存している米国の大学)に留学・編入する場合や海外の学生が日本に留学・編入する場合、ナンバリングの不整合は大きな問題として顕在化してくることが予測される。従って、既に科目ナンバリングを導入している大学は、大学間の整合性を意識した調整を試みることを望ましいと考えられる。

また、科目ナンバリングの策定に関する一定のスタンダードを示す、文部科学省によるガイドラインの作成が待たれる。今後、ナンバリングを導入する多くの大学にとっては、全国的なガイドラインの存在が科目ナンバー作成の助けとなるであろう。科目ナンバリングを導入している大学が未だ30%余に過ぎない現状であるからこそ、今後科目ナンバリングを導入する各大学がガイドラインに従ってナンバーを付与することによって、ナンバリングの全国的な整合性の構築が比較的容易に達成されるとも考えられる。

更に、科目ナンバリングのガイドラインを作成するにあたっては、国際的な学生の移動を見据えた上で、海外の大学にとっても理解し易いナンバリング・システムを構築することが望ましい。海外大学の中でも、米国以外の大学においてはナンバーの付与の仕方がまちまちであるため(第3章参照)、整合性のあるナンバリング・システムが特に発達している米国のシステムを参考としてガイドラインを作るのが現実的な施策であると考えられた。米国においても、大学間または州間においてナンバリング・システムの違いがあることには留意する必要があるが、それでも、第2章に記したように、難易度を示す数字については1~4が学部レベル、5以上が大学院レベルという全米

的なコンセンサスがある(島田 2013b, 栄 2014)。従って、特に難易度を示す数字は、米国式の表し方を意識して付与されるべきであり、その国際通用性が、留学等に際しての円滑な単位互換に寄与すると考えられる。

米国のシステムを模して日本の大学の科目ナンバリングを作成する際、日米の違いを鑑みて検討すべき点として、以下の3点が挙げられる。

1点目は、前述のように米国では学年の概念が希薄であるのに対し、日本の大学では対象学年を指定して開講されている科目が少なくないという点である。この違いにより、米国大学では難易度を表す番号が、日本では受講対象学年を表すものにすり替わる可能性がある。しかしその一方で、科目内容の純粋な難易度を順位付けて番号を付与することは、その妥当性や部局間での整合性に関して共通認識を得ることが困難である可能性が高い(吉田 2013)。ただ、単純に考えると、受講対象学年が上がるごとに科目の難易度も上がるはずであるので、対象学年を表す番号がそのまま科目の難易度を表すものと解釈することも可能である。

2点目として、米国大学では学科の名称と学問分野の名称が重複している場合がほとんどであるので²⁾、科目の開講学科を表すアルファベットがそのまま学問分野を表すのに対し(栄 2014)、日本の大学では、学部、学科の名称が多様で、学問分野を表していない場合が比較的多いという点にも留意すべきである。例えば「シティライフ学部」(宇都宮共和大学)、「21世紀アジア学部」(国士舘大学)などの学部の科目について、開講学部をアルファベットで表すとその学問分野が不明瞭となる。この点に関しては、大阪市立大学や九州大学などのように、開講部局を表すアルファベットと学問分野を表すアルファベットを併記するといった方法(第4章参照)が一つの解決策となり得る。

3点目として、米国では母国語である英語で授業が行われるのが通常であるのに対し、日本の大学では、国際通用性を意識して日本語以外の言語(特に英語)で実施される科目が比較的多いという点である。このため、第4章で確認した国内大学の事例では、言語を示す番号またはアルファベットを科目ナンバーに付記している大学が少なかつた。言語番号の付与は、米国大学との通用性の観点からはむしろ混乱を招くものであると思われるが、将来的に米国以外の海外大学も国際通用性を意識して言語番号を科目ナンバリングに付記するようになれば、言語番号の付与は一定の有用性を持つようになる可能性がある。

上記のような検討事項に結論を見出し、日米間で互換性のあるナンバリング・システムが構築されれば、これがその他の国々における科目ナンバリングのモデルとなり

得る。

ただし、科目ナンバリング・システム以外のシステムによっても、その利点を実現する制度が存在することには留意すべきであろう。例えば、欧州では ERASMUS 計画³⁾によって、1990 年前後からヨーロッパ単位互換制度(European Credit Transfer System; ECTS)という制度が構築されてきた。これは、従来のように単位数を1単位、2単位と表す代わりに、1ECTS、2ETCSと数えられるような新たな単位制度を設け、それを参加諸国間で共通する単位の数え方とするというものである。このシステムは大学間の単位互換を容易にし、学生は所属大学の卒業時期を延期することなく外国に留学することが可能となり、実際にヨーロッパの学生の国家間移動が促進された(小野 2000)。さらに1999年にはECTSをモデルとした UMAP 単位互換システム(UMAP Credit Transfer Scheme; UCTS)が、アジア太平洋諸国間の学生の移動を促進するためにいくつかの大学において導入されている(国立大学協会 n.d.)。

これらの取組みは、その目的とするところが大きく重複しながらも、各国あるいは各地域が独自に試行錯誤した結果生まれたシステムである。本稿はそれぞれのシステムの優劣を論じるものではないが、アカデミックな人材の国際的な流動化がますます加速する現在の世界において、日本国内に限らず国際的な整合性を持ったシステムの構築は、大学が目指すべき目標として妥当なものであると言える。

注

¹⁾ 例えばビリヤードをしている人が簡単なショットを打つ際に「このショットはビリヤード101だね」と言う。

²⁾ 米国大学では、「学部」の概念が薄く、科目の開講主体は「学科」(department)である。

³⁾ EU(当時 EC)加盟国間の人物交流計画の1つ。大学間交流協定等による共同教育プログラムを積み重ね、欧州大学間ネットワークを構築し、加盟国間の学生流動を高めて、EUの経済力強化と加盟国間の結合を促進させようとするもの(文部科学省 2010)。

参考文献

- Forest, J. J. F., & Kinser K. (2002) *Higher Education in the United States: An Encyclopedia*, Santa Barbara CA.
- 岐阜大学教育推進・学生支援機構 (2016) 『順次性のある体系的な教育課程の再構築に向けて』 (<https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/ir/numbering/tebiki.pdf>) (2019年8月6日)

- 橋本文彦 (2016) 「科目ナンバリングと学修成果の可視化」『大学教育』13(2), 13-25.
- 広島大学 (n.d.) 「授業科目ナンバリング」『広島大学学生情報の森 MOMIJI』
(<https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/numbering.html>) (2019年8月6日)
- 北海道大学教育改革室 (2013) 『順次性のある体系的な教育課程の構築に向けて～ナンバリング実施の手引き～』
(<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/gov/office/education/H2903numbering.pdf>) (2019年2月26日)
- 川嶋太津夫 (2013) 「教育の組織化, 教育課程の体系化・可視化による質保証ーコース・ナンバリングの意味と意義ー」『同志社大学学習支援・教育開発センターFD 第二部講演会講演録』51-76.
- 国立大学協会 (n.d.) 『UCTS (UMAP 単位互換方式) の普及』 (<https://www.janu.jp/international/umap-ucts.html>) (2020年12月11日)
- 九州大学教育企画委員会 (2014) 『科目ナンバリング実施の概要と手引き』
(<https://ueei.kyushu-u.ac.jp/data/numbering.pdf>) (2019年8月6日)
- 文部科学省 (2008) 『学士課程教育の構築に向けて (答申)』 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/thousein/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf) (2019年2月26日)
- 文部科学省 (2010) 「資料4ー2 国際的な教育連携プログラムに関連する資料」
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/_icsFiles/afieldfile/2010/02/03/1289808_03.pdf) (2020年12月24日)
- 文部科学省 (2012a) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～』
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/thousein/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (2019年2月26日)
- 文部科学省 (2012b) 『大学教育部会 (第21回) 合同会議 配布資料2 資料編(4/6)』
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2012/08/14/1324549_4.pdf) (2019年2月26日)
- 文部科学省 (2017) 『今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/_icsFiles/afieldfile/2017/12/27/1399988_02.pdf) (2019年2月26日)
- 小野嘉夫 (2000) 「ヨーロッパ単位互換制度 (ETCS-European Credit Transfer System) について」『学位研究』12, 3-28.
- Rogers, H. P. & Williams, O. H. (1935) Numbering college courses. *The Journal of Higher Education*, 6(1), 21-24.
- 栄陽子 (2014) 『アメリカ大学編入への道』三修社.
- 摂南大学 (n.d.) 『カリキュラムツリー, 科目ナンバリング』 (<https://www.setsunan.ac.jp/student/curriculum-numbering.html>) (2019年8月6日)
- 島田敬久 (2013a) 『学事歴とグローバル化ー米国大学における学期制の意味と運用の実際ー』
(<https://www.tuj.ac.jp/jp/news/wp-content/uploads/2013/07/academic-calendar-globalization-20130716.pdf>) (2019年8月6日)
- 島田敬久 (2013b) 『なぜアメリカの大学生は勉強するのか?ー「契約」の概念に基づく勉強させるためのシステムー』
(<https://www.tuj.ac.jp/jp/news/wp-content/uploads/2013/02/us-educational-system-20130219.pdf>) (2019年8月6日)
- 東北大学 (2014) 『東北大学「科目ナンバリング」実施マニュアル』
(<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/disclosure/disclosure/09/education0902/014.pdf>) (2019年8月6日)
- 東京大学 (n.d.) 『東京大学の科目ナンバリング』
(<https://www.utokyo.ac.jp/ja/students/classes/course-numbering.html>) (2019年8月6日)
- University of South Carolina (2019a), 2019-2020 Undergraduate Studies Bulletin.
(http://bulletin.sc.edu/content.php?catoid=88&navoid=2555#acalog_template_course_filter) (2019年7月26日)
- University of South Carolina (2019b), 2019-2020 Graduate Studies Bulletin.
(http://bulletin.sc.edu/content.php?catoid=88&navoid=2555#acalog_template_course_filter) (2019年7月26日)
- 吉田誠 (2015) 「カリキュラム・ナンバリング・マップとペルソナ・マーケティングを用いたカリキュラム改善システムの提案」『教職・教育実践研究』10, 9-17.

SUMMARY

The number of universities in Japan, which utilize a

class numbering system, is currently increasing, in accordance to the systematization of the Curriculum Policy (CP) encouraged by the Ministry of Education in 2008. An advantage of the class numbering system is that it makes it easier for students to transfer credits from a school to another school. The present study observes the situation of class numbering systems in Japan and other countries and confirms that the numbering systems should maintain a consistency across different schools.

KEYWORDS: COURSE NUMBERING, CP, VISUALIZATION OF CURRICULUM, CREDIT TRANSFER, CONSISTENT SYSTEM

† Shinichi Shoji^{*}, Sayaka Moriyama^{*2}, Naomi Wake^{*3}, Yuko Yamamoto^{*4}: A Note on Course Numbering in Domestic and Foreign Universities

^{*} Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan

^{*2} College of Liberal Arts and Sciences, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan

^{*3} Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan

^{*4} Faculty of International Studies, Nagoya University of Commerce and Business 4-4 Sagamine Komenoki Nishinshi, Aichi, 470-0193 Japan